

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720200  
 研究課題名 (和文) 中世フランスの写本メディアとナショナル・アイデンティティ形成に関する研究  
 研究課題名 (英文) Manuscript Media and The Formation of National Identity in Medieval France  
 研究代表者  
 鈴木 道也 (SUZUKI MICHIIYA)  
 埼玉大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：50292636

研究成果の概要：本研究は、中世フランスの王国年代記『王の物語』を主たる史料として、(a) 多様な歴史認識が交錯する中世社会にあって、権力体としての国家の成長と変容は「歴史家」たちの語りをどう変えたのか、また (b) 歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのか、という点の解明を試みた。結果として、度重なる再編過程を通じて国家の領域性と連続性に関する理論を次第に精緻化させていく、中世における史書編纂事業の具体相が明らかになった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	300,000	3,400,000

研究分野：ヨーロッパ中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：歴史叙述、フランス、年代記、写本、ナショナル・アイデンティティ、国家史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、直接的にはフランスにおけるナショナル・アイデンティティ形成過程の解明を目的としているが、その射程には歴史科学が直面する相互に関連する以下の問題群が意識されていた。第一に、いわゆる「言語論的転回」以降の歴史学の在り方を巡る問題がある。歴史あるいは歴史叙述そのものが、

不断に再編成される共同体の瞬間瞬間の構成主義的なアイデンティティを表象するものに他ならないということは近年繰り返し指摘されているが、構成主義的な立場に立つてあらゆる歴史の虚構性を指摘した後でも、そうした歴史ひとつひとつを構成していった主体の存在を意識しつつ、紡ぎ出される無数の歴史、つまりアイデンティティの関係性を明らかにする試みは有効だと考えられる。

第二に、ナショナリズムと歴史認識の在り方を巡る問題がある。エスニシティを基盤とする前近代のナショナリズムは、近代ナショナリズムの精神的制度的前景をなしている。大年代記の制作、宣伝、流布、拒絶あるいは受容、の各段階を具体的に辿る本研究は、歴史叙述とナショナリズムの今日的状況を考える上で、何らかの手がかりを与えるものと期待される。

第三に、コミュニケーションとメディアの在り方を巡る問題がある。中世ヨーロッパ社会における主要なメディアである写本、そしてそれを生産・消費していた人々が作り上げていた写本文化の基本的特質を、大年代記を素材として現在あるいは同時代の他文化圏と比較する作業を通じて、情報化社会を生きる我々とメディアとの関わり方について考えていくための一つの指針を得ることが出来るのではないかと思われる。

## 2. 研究の目的

国や地域への共属意識が支配装置として有効に機能することを認識していた中世ヨーロッパの王や貴族たちにとって、史書編纂事業はイデオロギー戦略の重要な柱であった。フランスのカペー、ヴァロワ両王権が主導した13世紀から15世紀にかけての『王の物語』(あるいは『フランス大年代記(Grandes Chroniques de France;以下GCFと略記)』の編纂もその一例である。大年代記は、王権の意向を受けたサン・ドニ修道院によって制作され、歴代諸王朝の歴史を「フランスの歴史」として描き出している。

本研究では、13世紀後半に成立し、その後数多くの複写(写本)が制作されることで、中近世フランスにおける「正史」の地位を得た、GCFと呼ばれる史書及びその写本群を主たる対象に、それがどのように産み出され、

また中世人たちにどのような影響を与えたのか、その社会的機能を明らかにする試みを通じて、前近代社会において「ナショナルなもの」が構想され、集合的記憶として受容されていく具体的様相を明らかにしようと試みた。それはキリスト教的世界観が圧倒的な影響力を有する中世ヨーロッパ社会において「国家史」が誕生する瞬間を描き出すことを目指している。

## 3. 研究の方法

(1) 研究全体の導入期間に位置づけられる第一年目においては、比較史的視座の設定と、方法論的検討の推進を目的として、以下三点に関する研究を進める。

①中世年代記研究の動向整理: 2005年7月に連合王国レディング大学で開催され、研究代表者も参加・報告した第4回国際中世年代記学会における約40本の研究報告を中心に、近年活況を呈している中世年代記研究に関して、研究のa空間的射程、b時間的射程、c権力構造との関わり、d他史料類型との関係、などの観点から動向整理を試み、研究ノートの作成を目指す。

②年代記写本テキストデータベースの構築: 現存する100点以上のGCF写本は、フランス国立図書館を始めヨーロッパ各地の図書館や文書館に散在している。この写本群の全体像に関する網羅的なデータベースは存在しておらず、また写本テキストの電子化も進められてはいない。写本マイクロの収集作業を進めるとともに、GCF写本情報データベースの構築を試みる。

③写本挿絵の図像学的分析に関する予備的考察: GCF写本挿絵に同時代の政治権力構造を読みとろうとしたエーデマンやレイノールの先駆的研究、あるいは15世紀以降の『時禱書』に関して近年精力的に進められている

図像分析の成果を手がかりに、中世写本メディアに現れる挿絵の基本的特徴とその分析手法について整理・紹介する研究ノートの作成を目指す。

(2) 研究二年目以降は、一年目の成果を踏まえ、GCF が産み出され、聖俗の有力諸侯層、あるいは新興市民層の反発や共感を引き起こしながら、写本メディアとしての特性を活かしつつ普及し、最終的に「正史」として定着していく具体的過程を多面的に考察した。具体的には、以下5点の研究課題を設定した。

①王朝と修史家たち：GCF を始めとして、「フランス史」あるいは「フランク史」と題される年代記は数多く存在しており、作成主体も多様である。カペー家に限定しても、王家と連携して史書編纂事業を進めていく修道院は、王朝発足以来、フルーリ修道院、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院、そしてGCFのサン＝ドニ修道院へと交代している。こうした王朝専属修史家の交代はいかなる背景を持つのか、その解明を通じて、当時の知的エリートたちの「フランス観」「王国観」の多様性とその競合について考察する。

②改変される記憶：GCF 写本の具体的記述内容に関しては、本来ならばその全体に渡って具体的な加筆・修正箇所の検討を行うべきであるが、その前段として先ずは、GCF 冒頭の、王朝起源神話からメロヴィング朝時代に関する記述に関して、(研究業績④でその概要を検討している) 13世紀後半から14世紀に普及した初期のGCF写本群を対象に個々の内容の偏差とその意味について考察する。

③普及するGCF写本(14世紀以降)：13世紀後半の成立以降、15世紀末に至るGCF普及の全過程を対象に、個々の写本の制作背景を検討する作業を通じて、GCF版「フランス史」が写本メディアにより中世ヨーロッパ全域に普及・定着していく過程を明らかにする。

④GCFにおけるテキストとイメージ：GCF写本に描かれているいくつかの特徴的な挿絵、例えばパリのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵写本の「世界図」や、ブルゴーニュ侯家が制作した写本の挿絵に現れる一族の肖像、あるいは写本毎に異なる歴代諸王整列の構図、などを分析の対象に、時としてテキストから離れ自由に構想される写本挿絵の象徴性について考察する。

⑤GCF写本に現れるナシオン(nation)とパトリア(patria)：GCFで描かれる「patria (=生まれ故郷)」としての「フランス(フランク)」と、その中に存在する「地域」との関係性を表すいくつかのメタファー(例：「親子」「兄弟」「夫婦」「四肢」など)を、テキストデータベースの統計学的言語学的分析手法を用いて分析し、GCFが「フランス」国家観だけではなく、そこに含まれる、あるいは重なり合う「地域」的なアイデンティティをどの様に捉えていたのか、中世人たちの重層的アイデンティティについて考える。

#### 4. 研究成果

(1) 11世紀から13世紀にかけての「王国史」誕生期に関して：神話的世界観とキリスト教的世界観が混交する初期中世から王国年代記が生み出されてくる過程の解明を目指した検討の結果、以下の三点が明らかになった。①『王の物語』は、その冒頭にフランク人のトロイア起源神話を置き、以後の歴史をフランク人王の血統的連続性を基本線としてフランク(フランス)史を描き出している。②中世初期メロヴィング王朝期にあつては、トゥール司教グレゴリウスの『歴史十書』に代表されるように、フランク王クロヴィスの改宗を一大画期としてキリスト教的世界観のなかにフランク王国史を位置づける傾向が顕著であった。③王朝神話としてトロ

イア起源神話が選択された背景を、『歴史十書』から『王の物語』に至る途上で編まれた数多くの史書（具体的には、1:『偽フレデリウス年代記』、2:編者不詳『フランク人の歴史』、3:エモワン=ド=フルリ『フランク人の歴史』）、そして『王の物語』の祖型をなす四点の歴史書集成（1:11-12世紀:サン=ジェルマン=デ=プレ修道院編ラテン語年代記集成 [B.N. latin. 12711]、2:13世紀初め:サン・ドニ修道院編ラテン語年代記集成 A[Vatican, Reg. lat. 550]、3:13世紀前半:『シャンティイ年代記』 [Chantilly, MS. 869]、4:1250年頃:サン=ドニ修道院編ラテン語年代記集成 B[B.N. lat. 5925]）の系譜関係分析によって考察した結果、メロヴィング王朝史を「神意ではなく人意」によって織りなされる王朝史話として描き出そうとするカペー朝の王権観が明らかとなった。

(2) 14世紀におけるサン=ドニ修道院の修史事業に関して: GCF 成立以後のサン=ドニ修道院で展開された史書編纂事業を概観し、その編集傾向を確認した。次にギュイヨ=バシーらの近業を参考にして、14世紀前半のリシャール=レスコによる GCF 改訂作業を、改訂版の内容構成を通して明らかにし、その意味を考えた。その結果、この年代記は何度かの修正を経ることで次第に国家の領域性と連続性に関する理論を精緻化させていくことに成功したが、依然としてその構成員を「王と諸侯」に限定したフランス史であったことが明らかになった。したがって「国家史」の歴史を明らかにする場合には、キリスト教的世界観からナショナルな存在を切り取って特別な存在へと位置づけていく「普遍年代記」から「王国年代記」へという歴史認識の変化とともに、「王と諸侯の」フランス史か

ら「フランス国民の」フランス史へと変わっていく、国家観・国民観の変容についても考える必要があると思われる。

(3) 世界年代記『歴史の鑑』との内容構成・普及過程との比較に関して: ここでは、GCFと同様ルイ九世の援助を受けて制作された後、ヨーロッパ全域で直ちに好評を博した、ヴァンサン=ド=ボーヴェ編の百科全書的著作『知識大鑑』のなかから、ラテン語史書『歴史の鑑(Speculum historiale 以下SHと略記)』を取り上げて分析を加えた結果、以下2点が明らかとなった。①GCFが王朝史を王国史として独立させているのに対して、SHは間違いなく普遍年代記のジャンルに属するものであり、そこではフランク(フランス)王もその王国の歴史もキリスト教的世界を構成する一有力諸侯<princeps>に位置づけられていたこと、しかし②第一版から第二版への改訂作業のなかで最も意識されていたことは、カペー朝の王朝的正統性を、皇帝シヤルルマーニュとの系譜関係から証すことであったこと、などが明らかになった。そして、その正否はともかくとして、普遍史の文脈に織り込まれたカペー的王権観は、13世紀後半から14世紀前半というカペー朝末からヴァロワ朝成立にかけての混乱期にあって、少なくともGCFよりは多くの読者を得ていた。

(4) 14世紀後半における学識者たちの自己認識に関して: 14世紀の偉大な思想家にしてナヴァール学寮長でもあったニコラ=オレームを中心に、当時一大学閥を形成していたナヴァール学寮出身者たちの社会観を分析し、次いで幼少期からの家庭環境を通じて得た豊富な学識を活かし、特に組織に属することなく旺盛な執筆活動を展開したクリスティエヌ=ド=ピザンと、サン=ドニ修道院所属の

修史家として長大な国王伝記を残しているミシェル=パントワンの二人をとりあげ、大学人たちの社会観と比較した。彼ら学識者たちは、王国廷臣、大学人、著述家、教会歴史家など様々な職種に従事しながらも、分別を持った理性的な存在であることを指標とする新たな社会集団として姿を現すや、直ちに「われわれ」を既存の支配階層とともにエリートのかなかに位置づけ、「かれら」一般大衆との間に一線を画すような主張（「王と諸侯と学識者のフランス史」）を展開していることが明らかとなった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① Michiya SUZUKI, Medieval vernacular chronicle in the process of formation -from tenth to twelfth century-, *Proceedings of the fifth international Conference on the Medieval Chronicle (Belfast Queen's University)*, 2008, pp. 26-34, 査読あり。

② 鈴木道也、『『フランス大年代記』とナショナル・アイデンティティ - 歴史叙述研究を巡る最近の動向から -』、『西洋史研究』、36号、2007年、21-41頁、査読あり。

〔学会発表〕（計3件）

① 鈴木道也、「中世ヨーロッパにおける王国年代記の諸相 -フランス王国の『王の物語』（あるいは『フランス大年代記』）を中心に-」、西洋中世学会（若手セミナー）、2008年10月26日、慶応義塾大学

② Michiya SUZUKI, Medieval vernacular chronicle in the process of formation -from tenth to twelfth century-, Fifth

International Conference on the Medieval Chronicle, 2008年7月20日, Queen's University Belfast (連合王国)

③ 鈴木道也、『フランス大年代記』写本の普及とナショナル・アイデンティティ-中世歴史叙述の「間テクスト性」について-』、西洋史研究会、2007年11月18日、東北大学

〔図書〕（計3件）

① パトリック=ギアリ（鈴木道也ら訳）、白水社、『ネイションという神話』、2008年、270頁。

② 阪本浩ら編、南窓社、『ソシアビリテの歴史的諸相』、2008年、248頁（149-164頁）。

③ 鈴木道也ら編、新泉社、『近世・近代日本社会の展開と社会諸科学の現在』、2007年、610頁（475-495頁）。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 道也 (SUZUKI MICHIIYA)  
埼玉大学・教育学部・准教授  
研究者番号：59292636

##### (2) 研究分担者 なし

##### (3) 連携研究者 なし